



TITLE:

# 白話小説史に於ける《紅樓夢》の位置

AUTHOR(S):

井波, 陵一

---

CITATION:

井波, 陵一. 白話小説史に於ける《紅樓夢》の位置. 東方學報 1983, 55: 325-351

ISSUE DATE:

1983-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66621>

RIGHT:

## 白話小説史に於ける《紅樓夢》の位置

井 波 陵 一

文學作品が固有の情況を背負って現われることは言うまでもないが、兩者の關係はそれほど單純ではない。作家の創造力がその高さに比例して兩者の關係を複雑にするからだ。《紅樓夢》はまさにその典型で、厖大な數にのぼる評論は或いは作品から情況を量り、或いは情況から作品を望んで全貌をとらえようとしてきたが、前者は作品が情況の、後者は情況が作品の、様々な要素として分解するのを免れず、百科全書と稱される《紅樓夢》の事項檢索に終った場合が多い。この論文では賈寶玉の少女達に對する態度を檢討することによって《紅樓夢》の位置づけを試みる。

### I

寶玉の生活舞臺大觀園は元春の發案で姉妹達に解放され、例外的に寶玉も加えられる。<sup>①</sup>姉妹達の中で詩文に長じた者となれば、元春省親の際の「迎・探・惜の三人の中では探春が一番ですが、彼女も薛・林の兩人とは勝負にならないことを承知しています。」（第18回）から見て、まず寶釵と黛玉に絞られる。それに探春が續き、更に例外的存在として「汚らわしき」寶玉が加わる。<sup>②</sup>四人の中で最初にスポットを當てられるのは寶玉だが、大觀園に移り住むことを少女全體の喜びとして感じるのには實は彼を置いて無い。彼は「大觀園を、」もともと天は人を萬物の靈長としてお作りになったが、山川日月

の精髓は女兒にのみ集まり、男子はカスやアブクに過ぎない。」(第20回)という自らの幻想を保證する現實的根據とみなすからだ。寶玉によれば園の主役はあくまで少女達で、彼自身の存在價值は少女達との關わりの中で初めて生まれて来る。しかも彼の幻想は彼と個々の少女との關わりではなく、少女達相互の關係——その總體を彼が自分の満足する方向へ確認することによって根據を與えられる。彼の満足する方向——その極みには既に一人の少女が居る。林黛玉。

入園當初、寶玉と黛玉の關係に描寫が集中するのは、黛玉がそれを通じて少女としての最高の姿を示すからに他ならぬ。

水に投げ込んだじゃダメ。ここではきれいでも、いったん流れ出たら人家のある所では汚い物や臭い物が雜り込みますから、やはり花を辱しめてしまいます。あちらの隅に花塚がありますの。掃き寄せてこの絹の袋に收めて埋めたなら、遠からずして土に還りますからきれいですわ。(第23回)<sup>③</sup>

わざわざ花塚をこしらえて桃花を葬るという痴れ者の行爲も、園を美しく彩り、人の心を魅了したものに對する哀悼の意はどうすれば十分に盡されるかと考えてみると、他のどんな方法よりもふさわしく映る。従つてそこまで自然にやつてのける黛玉にこそ大觀園に住む少女の最良の資質が見出される。他の少女達が、例えば年中行事の芒種節<sup>④</sup>を内發的な惜別の念を以て越えようとすれば、それは黛玉の「葬花」に近づくことを意味する。寶玉と黛玉の關係は、「葬花」のような痴れ者の行爲こそが自らの幻想の根據になると認める満足感と、そうした行爲の理解者が自分の傍に居ると信じる安堵感との絡みの中で發展する。しかもそれは追いつめられた形でより強く現われる。寶玉との繋がりを見失つたと決め込んだ時に作られた「葬花詩」がその典型だ。埋香塚にて飛燕殘紅に泣く(第27回)——確かに悲哀に満ちてはいるが、あくまで寶玉を避け、しかもなおひっそりと花を葬ろうとする姿に、<sup>⑤</sup>或いは「質もと潔くして來りまた潔くして去るは、汚淖<sup>カサ</sup>れて渠溝に陷るに強れり。」といった詩句の中に、感傷の底に潛む固さが感じ取れる。そして涙脆いこの少女が胸の奥深く祕

める固さとは、實は自分の生きる世界を決して譲らぬ激しさ・手強さを意味し、それこそが痴れ者の行爲を通じて寶玉の幻想に根據を與える。自分を常に寶玉の意識の中に見出そうとする誰憚らぬ態度に黛玉の激しさは最も強く現われる。彼女の激しさはまるで錐を揉み込むように迫って來るが、單に心情がそうだと言うばかりでなく、表情や身のこなしをも含めた全體がそうした鋭さを持つ。換言すれば様々な形で現われる鋭さが彼女の純粹さを印象づける。そして純粹さが宿命的に併せ持つひよわさ（これは彼女の病弱に繋がり、精神的な所謂「大人への成熟」に對する危うさを暗示する）をも浮き彫りにする。

黛玉が理想の少女として大觀園の中心的存在である以上、寶玉は他の少女達に對してもまた個性を惜しみなく發揮することを願う。少女世界はあくまで少女達自身が築き上げるのだが、寶玉は「汚らわしき」男子なるがゆえにその世界全體を意識的にとらえ返すことができ、しかもそこに最高の價值を見出す。少女達自身が世界を築く——大觀園はそれを保證する場だと先驗的に信じ込む彼に最初の喜びをもたらすのが詩社の結成である。

## II

孰か謂う蓮社の雄才は獨り鬚眉にのみ許し、ただ東山の雅會を以てわが脂粉に譲ると。（第37回）——詩社の結成は詩を通じて個性を發揮することを意味し、それだけに姉妹達の意氣ごみも大きい。海棠を詠んだ最初の集まりで彼女達が雅號を贈り合う場面（第37回）はそうした雰圍氣をよく傳えている。

（黛玉）詩社を起すとなれば私達は皆詩人になるわけですから、まず「さん」付けの呼び方を改めないと俗ですわ。  
（李紈）ごもっとも。全員號をつけましょう。それで呼び合えば優雅だわ。私は稻香老農。横取りはダメよ。

(探春) 私は秋爽居士。

(寶玉) 居士や主人ってどうもそぐわないし餘分だよ。ここには梧桐や芭蕉がうんとあるのだから、それにちなんだ號をつけた方がいいな。

(探春) あったわ。私は芭蕉が一番好きだから蕉下客と名乗ります。誰もが奇抜で面白いと言います。

(黛玉) 早くこの方を引っ張って行って。乾肉を煮込んで一杯やらなきゃ。

誰も解りません。

(黛玉) 昔の人が言ってますわ、「蕉葉鹿を覆う」って。御自分で蕉下客とおっしゃったんですもの、鹿さんに間違ひありません。早く乾肉をこしらえましょう。

それを聞いて皆笑い出しました。

(探春) ややこしい時に巧いこと言って人をこけ、になんかするもんじゃなくてよ。私だってもうあなたのためにピツタリの素敵な號を考えついているのですからね。

(探春) 昔娥皇女英の御二人が涙を注いで竹に斑點をこしらえたので、現在斑竹は湘妃竹とも呼ばれます。この方の住居は瀟湘館ですし、涙脆い御性分、將來旦那様を想う餘りあその竹も斑竹に變えてしまわれるでしょうから、以後この方を瀟湘妃子とお呼びしたらよろしいわ。

それを聞くと皆手を打って賞めそやします。黛玉はうつむいて口を挟まなくなりました。

(李紈) 私は寶釵さんにいいのを考えついているの。三文字なんだけど。

惜春と迎春が何かと尋ねます。

(李執) あちらを蘅蕪君に封じたいのですけど、皆さんいかが？

(探春) その封號とっても素敵<sup>⑥</sup>。

姉妹達のこうした弾み様は當然寶玉に最高の喜びをもたらす。自分もその席に連なる興奮を抑え切れないかのように

(寶玉) 私は？ 私にも考えて下さいよ。

(寶釵) もう出来てますわ。無事忙の三字がどんびしゃり。

(李執) 舊號の絳洞花王がいいわよ。

(寶玉) 小さい頃やらかしたことですよ。そんなの持ち出すなんて。

(探春) あなたの號はすぐ多いのに、この上何て名乗るおつもり？ 私達好きに呼びますから、あなたはそれに返事なさればよろしいの。

(寶釵) やはり私がつけてさしあげねば。最も俗なんですけど、これがピッタリなんですよね。天下に得難きは富貴、もひとつ得難きはひま<sup>⑦</sup>でして、この二つ兼ね備えるわけにはいきません。ところがまああなたは兼ね備えておいで。そこで富貴閑人とお呼びしたらどうかと。

(寶玉) とてもじゃないけどそんな。じゃあまあ皆さんのお好きなように<sup>⑧</sup>。

結局寶玉はちゃんとした號をつけて貰えないが、彼自身そんなことはどうでもいい。姉妹達が詩を作ることに意氣ごみを示すのに對し、彼はそうした彼女達の姿に觸れて活氣づくだけで、肝腎な自分の詩の出来映えなどあまり氣にしないからだ。會のたびごとに姉妹達の詩才が自分を壓倒する事實の方が彼には遙かに意義を持つ。詩社への彼の執着は姉妹達のそれとは異質な所から發する。

詩社の結成は當初の元春の考えを最高のレベルで實現したことになるが、才能の有無や興味の厚薄から來る詩社の重み

の違いが氣になる。残る迎春と惜春はどうだろうか？

(李紈) 迎春さんと惜春さんは何とつけます？

(迎春) 私達詩は苦手ですのに號だけつけてどうしましょ。

(探春) それでもつけた方がいいですわ。

(寶釵) この方のお住居は紫菱洲だから菱洲、惜春さんは藕香榭だから藕榭とお呼びすればいいでしょう。<sup>10)</sup>

迎春の返答はもっともだが、一瞬座が白けかかる。一本氣な探春が食い下がるのも無理はない。機轉とも言える寶釵の提案、やはり詩を作らぬ自分の方へ引き寄せ、二人に出題係と清書係の役を振り當てる李紈の配慮によってこの場は何とかおさまり、探春も「じゃあそういうことに。ただ考えるところとおかしいの、だって發起人は私でしょ、それが御三方に監督されちゃうのですもの。」と冗談口をたたくが、詩社での迎春・惜春は何と言っても影が薄い。惜春の方は後に詩才ならぬ畫才を發揮してそれを補う(第42回以後)が、迎春には何も無い。それどころか病氣で姿を消しさえする(第49回)。元春の燈謎を當て損い(第22回)、酒令ではわざと間違えるように頼まれる(第40回)存在感の希薄な「二木頭(二のどの坊)」(第65回、興兒の評)は、姉妹達が寶玉の幻想に應えていく中で一人取り残されていくようだ。それは先々の展開と微妙に絡むが、ともあれ詩社は姉妹達の世界として開かれる。

詩社の結成という質的飛躍は當然量的擴大を目指す。但し詩文の素養のある姉妹達に限られるから園外へ求めるしかない。結成の翌日に湘雲が加わる。彼女の正式の入園はもっと遅れるが、寶玉に「詩社にあの人を缺いて何の面白味があるう」(第37回)と言わせるだけの人物だし、彼女の方も「あの方々は詩を作りながら私には聲もかけて下さらない」とジリジリする。招かれるや一度に二首こしらえて皆をうならせ、聯句をこしらえた際にも飛び抜けて多く應酬する彼女は「詩瘋子(詩氣狂い)」(第52回、寶釵の評)にふさわしい。しかし湘雲のような實力者が加わるのは當然と言えば當然で、

續く香菱の場合實力こそ湘雲より遙かに劣るものの、姉妹とも侍女とも言いかねる意味から、斜めにせり上がって來るといふ特異性を持つ。彼女の情熱に満ちた加入は詩社の厚味を確實に増す。湘雲と香菱はともに蘅蕪苑に住むが、二人の詩への没頭よりは實に愉快だ。

いま香菱は詩を作ることしか頭に無いのですが、それであまりに寶釵を煩わせるのも憚る、という所へ巧い具合に湘雲がやって來たのでした。この湘雲がまた大の話好き、その彼女に香菱が詩の講義を頼んだのですからさあ大變、益々調子づいて夜昼かまわず話したい放題の有様。

（寶釵）やかましくって私ほんとに耐えられません。女の子がお構いなしに詩をまっとうな事として論じたりしていると、學問を積んだ人の耳にでも入るものなら笑い者にされ、本分を守らないと言われますよ。香菱一人でも始末に負えないのに、選りに選ってあなたのようなお喋りさんが加わって何をまくし立てているのかと思えば、杜工部の沈鬱・韋蘇州の淡雅とはかくかく、溫八叉の綺麗・李義山の隱僻とはしかじかといった具合。ただいまパリパリの二人の詩人には知らんぷりで、そんな過去の人達なんか取り上げたって仕方ないでしょ！

（湘雲）どの二人ですの？ おねえさま、おっしゃって。

（寶釵）痴れ者香菱のおもいつめ、氣狂い湘雲のながばない、ですよ。

二人はこれを聞いて大笑い。（第49回<sup>①</sup>）

續いて詩社は四人の姉妹に恵まれる。寶琴・岫烟・李紋・李綺の上京組だが、四人一舉にという點に湘雲・香菱とは違つた意義がある。湘雲の時には自分の迂闊さを口惜しがり、香菱の時には「天地は至公至平だ」と喜んだ寶玉は、豫期せぬ四人が現われたというだけでも、「天よ、天よ、あなたはどれほどの素晴らしき寶をお持ちになって、このような人の



上なる人を生み出されたのですか。」(第49回)と憑かれたようになる有様だから、その四人が園に住み(厳密に言えば寶琴は賈母の手元だが)、詩社にも加わるとなれば興奮するのも無理はない。朝早くから會場の蘆雪庵へ押しかけて、「お嬢様方は食事をなさってからおいでになりますのに、あなたさまはまたえらくお氣の早いことで。」(第49回)と笑われる。

「詠白海棠」、「菊花詩」(第38回)を経て「即景聯句」に至ると、詩社は姉妹達が築き上げた世界として質的にも量的にも最高に充實する。特に聯句の持つ性格から来る、これまでの會との雰圍氣の相違に注目したい。個々の句の出來映えを競いながら全體を一貫したものに仕上げていく聯句の場合には、すばやい應酬に見られる個性のぶつかり合いが遙かに動的で活氣に溢れる。

湘雲喉が渴いて茶をガブ飲みしてる間に、岫烟に「空山に老鶻泣く。階坪上下に隨い、」と先を越されます。湘雲湯呑みを放り出して、「池水浮漂に任す。照り耀きて清曉に臨み、」と忙てて付けます。(第50回)<sup>15</sup>

など二十箇所以上もある「忙」という表現がそうだし、「眉をつり上げ、體をピンと似ばす」や「胸にこぶしを當てて甲高く叫ぶ」となると、姉妹達の力の入り様がより具體的だ。しかし最初からこれほどまでに興奮しているわけではない。鳳姐の飛入りも一興を添えるが、「鳳姐↓李紈↓香菱↓探春↓李綺↓李紋↓岫烟↓湘雲↓寶琴↓黛玉↓寶玉↓寶釵」と順番通りに進む穩かさは詩社の擴がりを改めて示す<sup>16</sup>。その安定感を踏み臺にして湘雲を軸とする華やかな應酬が始まる。

寶玉は寶釵・寶琴・黛玉の三人が一致して湘雲と渡り合うのを見て面白くてたまらず、句を付けることなどそっこのけ。……

(湘雲) あなたさっさと引っ込んで。能無しさんは却って私の邪魔なんだから。(第50回)<sup>17</sup>  
と寶玉を全く押しのけた姿こそ詩社の極致であり、寶玉にとって最良の時となる。詩社は大觀園が寶玉の幻想に十分耐え得ることを立證する。

### III

詩社には侍女達が加われないという限界がある。しかし數の上から見れば侍女の方が壓倒的に多いのだし、自分が煙と化して風に吹き散らされるまで傍に居て欲しいと願う時、寶玉は姉妹・侍女の區別を越えた少女全體を思い描く。それゆえ姉妹とともに侍女の全てをも加えた世界が築かれることを望む。それは世俗の上下關係をそのまま持ち込んでいる大觀園に少女ということだけを問う世界が築かれることを意味する。それでは姉妹と侍女が少女という共通項のもとで築く世界はどんな形でどの程度まで實現されたのか？ 侍女は系列化されて受身の立場にあるので姉妹の方から上下關係を取り拂わねばならぬが、厚い信賴感がその突破口となる。平兒について見ると、彼女が賈璉と鳳姐の夫婦喧嘩のとぼちちりを受けた（第44回）時、李纨は彼女を自分の所に泊めているし、寶釵はなだめ諭し、また寶玉は自分の従兄夫婦の失態ということで彼女に謝るといった具合だ。翌日の鳳姐への李纨の言葉も溫厚な彼女にしては随分手嚴しいが、これも平兒に對する信賴の厚さゆえと言える。

こうした信賴感・尊敬の念が上下關係よりも優先されるのが寶玉の誕生日（第62回）で、寶琴・岫烟そして平兒も日と同じくする。

（襲人）二月十二日は林のお嬢様です、どうして誰も無しでしょう？ ただうちの人ではありませんが。

（探春）私の記憶力はどうなっちゃったんでしょ！

（寶玉）彼女は黛玉さんと同じ日なのさ、だから覺えているんだよ。

（探春）なんと二人は同じ日でしたの。毎年おじぎ一つしてくれないのだから。平兒さんの誕生日だって今日やっと

知ったばかり。

(平兒) 私達は取るに足りない人間、誕生日だとしてお祝いを申し上げる福運も無ければ、お祝いを受ける地位も無いのですから騒ぎ立ててどうしましょう。おとなしく済ませればいいのですわ。今日はいにく彼女(襲人)が表沙汰にしてみましたので、お嬢様方がお住居へ戻られた後改めて挨拶に上がらせていただきます。

(探春) そんなこといいの。それより今日はあなたのために誕生祝をしなくっちゃ。でないと私氣が濟まないわ。

(寶玉湘雲等) そうですとも。(第62回<sup>19</sup>)

この時賈母や王夫人は太妃の葬儀に赴き、寶玉の誕生祝は祖母や父母抜き(賈政は任地)で行われる。もし賈母等が居れば當然そちらが中心で、平兒が主賓となり侍女達が卓を圍む筈もない。もちろん宴席の主役は姉妹達が取るかもしれないし、實際湘雲が大活躍したわけだが、主役端役の振り分けは問題にならない。むしろ聯句の會と同じくこの祝宴にも一つの安定感が見出されることに注目すべきだ。一人一人座席を紹介されて各卓で小さな輪を作り、更に全體としての大きな擴がりを見せる。<sup>20</sup>そして姉妹と侍女とを隔てないためには雅俗共賞こそが大切で、香菱ですら難儀する上に「活氣が無くて退屈」(湘雲評)な射覆は敬遠され氣味、<sup>21</sup>搏戰の方が歡迎されて宴の雰囲気<sup>22</sup>を盛り上げる。

賈母や王夫人が留守で拘束されないため氣儘に楽しみ、「三」「四」「七」「八」と大聲で叫びます。廳内一面に紅は飛び翠は舞い、玉は動き珠は揺れるといった具合で本當ににぎやかです。(第62回<sup>23</sup>)

侍女達は姉妹達とともに寶玉の目の前で少女として世界を築いて見せる。更にこの夜寶玉が住む怡紅院では襲人・晴雯・麝月・秋紋・芳官・碧痕・小燕(一百二十回本では春燕)・四兒の八人が内輪でお祝いをするが、「花占い」をするには人數が足りないのです。

(小燕) こっそり寶のお嬢様と林のお嬢様に遊びにいらっしゃるようお願いしたらどうでしょう。二更まで遊んでそ

れから寝んでも遅くありませんわ。

(襲人) 出入りして騒いで夜巡りの人に出食わしでもしたらねえ。

(寶玉) 平氣さ。うちの探ちゃんも飲ける口だから聲かけなくちゃ。それと琴さんもね。

(衆人) 琴のお嬢様はダメですわ、上の若奥様(李紈)のお宅ですもの。餘りに騒ぎ過ぎることになります。

(寶玉) 平氣さ。早いことお願いに行つてよ。

小燕と四兒は返事もそこそこに急いで門を開けさせ、手分けしてお願いに行きます。晴雯・麝月・襲人の三人は、あの二人では御二人とも應じては下さるまい、自分達が出向いてどうしてもお連れしなくては、と相談します。そこで襲人と晴雯は急いであやに提燈を持たせて出かけます。案の定寶釵は夜も更けたから、黛玉は體の具合が良くないからと言いますので、二人は「とにかく私達の顔を少しでも立てて下さいませ、ちょっとおつきあい下さればよろしいのですから。」と再三懇願します。探春の方は大喜びですが、李紈を誘わなくて後で知れたらまずいと考え、翠墨を小燕につけて李紈と寶釵と一緒に顔を出すよう再三勧めさせたので相前後して怡紅院にやって來ました。襲人はまた有無を言わず香菱を引っ張って來ます。炕の上は卓を一つ繼ぎ足してやっとちゃんと坐れるようになります。(第

63回)

十七人が輪になって骰子を振り、湘雲が九點出せば「↓寶玉↓襲人↓芳官↓秋紋↓小燕↓碧痕↓四兒↓晴雯↓麝月」、香菱が六點出せば「↓翠墨↓寶釵↓探春↓寶釵↓李紈↓黛玉」などと、皆一様に胸ときめかせつつ數えていき、當たった者が籤子を引いてその内容に笑ったり當惑したりする光景はまさに雅俗共賞だし、日中と違って小燕や四兒などより下位の侍女や役者上がりの芳官が輪の中に居ることは少女の厚味を増す。

黛玉から詩社、更に誕生祝と、大觀園は幻想の根據たるにふさわしく、少女達がただ少女として築く世界を成立させる。

黛玉が中心となり、その周囲に姉妹達、更に侍女達が全て加わる——寶玉の確信は揺るがない。しかし彼が侍女達もまた姉妹達とともにただ少女として大觀園に存在し得ると信じ、園を自らの幻想の根據として絶對化しようとも、侍女達の方は寶玉なればこそ問わないで済んだ現實の關係（血縁や主従など）から實は少しも自由ではない。むしろ彼女達の少女としての申し分の無さは侍女としての申し分の無さにびったり重なり合う。鴛鴦・平兒・彩霞・襲人——少女世界なるものが崩壊したとしても彼女達は自分を何ら損うことなく申し分の無い侍女として存在し續ける。彼女達の行動は性格の良さ・思慮の深さ・仕事への熱意などを武器に獲得した地位の枠を出ない。しかも大觀園には鴛鴦や平兒のような一流の侍女を目指し、そのために現實の關係に活路を見出そうとする侍女達が多數存在する。それは春燕や四兒、芳官と同等もしくはそれ以下の侍女達で、その上昇志向が自分の背負った現實の關係を有效なバネに轉化しようともがくのは宿命的だ。そこに際限の無い明争暗闘が生まれる。寶玉は侍女達に肩入れするが、それは彼女達を自らの幻想にふさわしい存在とみなすから全てを許すに過ぎない。彼は侍女達をただ少女として自分の方へ引き寄せるだけで、自分の方から彼女達の現實に歩み寄ろうとはしない。だからこそ大觀園が新たに秩序づけられた時、彼の幻想は一舉に崩壊する。

## IV

賈家の人間關係に初めて龜裂が生じたのは賈赦が鴛鴦を側室に所望した事件（第46回）で、それまで賈政の側室趙氏とその子賈環を除いては正面から指摘されなかった人格的缺陷が露出する。<sup>28</sup>この結果賈赦と邢夫人が舞臺の脇へ押しやられたことは詩社での迎春（賈赦の娘）の存在感の薄さと結びつく。この事件が主人同士の龜裂とすれば、流産した鳳姐の後を受けた探春への召使の態度は主人と召使との龜裂を見せつける。

茶を飲み終るや吳新登のかみさんが入って來て報告します。「趙のお部屋さんの弟趙國基が昨日亡くなりました。昨日奥様に申し上げた所、わかったからお嬢様と若奥様に報告せよとの仰せでした。」言い終わると畏まって立ち、それきり黙ります。この時大勢報告に來合せていましたが、皆二人の取り裁きや如何にと聞き入ります。もし適切に處置すれば恐れ入るものの、ちょっとでも行き届かぬ所があれば、敬服しないぐらいでは濟まらず、二の門を出たらたとえ笑い話をこしらえて笑い者にしてやろうという魂膽です。吳新登のかみさんにしても腹に一物あるわけで、鳳姐の前だったらとくに忠勤に勵んで多くの案を出し、先例も調べ上げて鳳姐の裁斷に委ねる所ですが、李執はおとなしいし、探春は年若いお嬢さんじゃないかと軽く見て、そこでこの一言だけ口にして二人の考えを探ってやろうというのでした。(第55回<sup>27</sup>)

ここに見られる驅引はごくありふれているし、それ自體の是非を問うことなど無意味だが、この時期になって表面化したことは見逃せない。またこの事件を知った鳳姐が平兒に對して、これまでの自分のやり方は強引で「虎にまたがってき」<sup>28</sup>とか、それに對する召使達の恨みは最早「私達二人の四つの目、二つの心では防ぎ切れない」などと本音を洩らすのも印象的だ。

主人同士、主人と召使相互のこうした龜裂に續くのは當然召使同士の龜裂で、それは芳官を始めとする少女役者達の入園をきっかけとする。彼女達の好き勝手な振舞は確かに刺激的だが、大量の入園自體が既に園内をごたつかせていることも見落とせない。趙氏が怡紅院に乗り込んで芳官をひっぱたと、<sup>29</sup>

趙氏について來た連中は外でこの様子を聞くと皆胸がスーッととして、「今日という日がありました。」と念佛を唱えます。怨みを抱いていた例のばあや達も芳官が打たれたのを見て皆思いを遂げたという所。(第60回<sup>29</sup>)  
しかしこうした連中の面白からぬ對象は何も芳官やその仲間達だけに限られず、襲人や晴雯だとしてそれを免れてはいな

い。もちろん彼女達が抱く嫉妬や怨恨は入園以前に襲人が寶玉をたしなめたことに通じ、決して特別な感情ではない。ただ背景としてばあや達の分擔による園内の土地や草木の管理が浮かぶ。こうした措置は「今では草を一本餘計に摘んでもいけなくなった」(第62回)ことを意味する。しかも人格的にすぐれた者に任せる筈だったのに、春燕の言葉を借れば「厭くこと無き」連中まで含まれる。僅かな利益も見逃すまいと目を光らせる人間が縄張り意識を持つのは當然で、大觀園は金儲けの場という性格を押しつけられる。ばあや達にとって園内でいい暮らしをする侍女達は羨望の的だし、収入源に好き勝手に手をつけたがる憎むべき存在とも言える。草花をあくまで草花として愛でる少女なればこそ寶玉が襲人・晴雯はおろか芳官の氣儘さまでも許すのに對し、草花になにがしかの利益を見てしまえばあやは芳官はもちろんのこと、襲人・晴雯に至るまで容赦しない。ばあや達の考えは寶玉の幻想と相容れず、侍女達とばあや達の争いという形で再三火花を散らす。芳官と義母或いは趙氏、春燕とその母のいさかいや、日頃溫厚な鶯兒の春燕のおばに對する憤りなどは寶玉の幻想を見事に支えて見せる。彼は春燕に言う——大丈夫、私がいるからね(第59回)。

しかし趙氏と芳官達の派手な喧嘩によって鬱積していたものがどっと吐き出され、一つのヤマを越えた後、事態は更に複雑化する。寶玉は、

女の子は嫁ぐ前は値段のつけられない寶珠だけど、嫁いでしまうと、どういう譯かすぐに多くの缺點を曝け出すようになり、珠は珠でも輝きを失くした死んだ珠だ。もっと年取ると更に變つて、珠ではなく魚の目玉になり下がる。確かに同じ人間がどうして三通りの姿になるのだろう。(第59回)<sup>32</sup>

と嘆くが、少女ということを絶對視する彼には解きほぐし難いとしても、侍女とばあやの癒着は現實に深く根を下ろした人間の、その限りに於ける手強さを見せつけながら存在し、しかも大觀園をめぐる一層強められる。寶玉には興味の無いことだろうが、入園は侍女にとってもばあやにとっても切實な問題で、前者が姉妹(寶玉)付きになることと後者が

草木の管理や使い走りの仕事にありつくことは、それが彼女自身の、そして身近な人々の生活を樂にするという點から見れば何一つ異ならない。柳五兒は芳官に語る。

そう言われても私せっかちだから待ち切れないわ。この機會に選ばれたら、一つには母さんのために氣を吐いたことになって、母さんも私を生んだ甲斐があるというもの。二つには月々のお給金が加わって家計に餘裕が出るわ。三つには私も氣が晴れて病氣も直っちゃうかも知れない。たとえ先生にかかり藥を飲んだとて、家のお金は使わずに濟むでしょ。(第60回<sup>35</sup>)

寶玉は少女ということだけを問おうとするが、柳五兒にすればその背後に色濃く影を落とす現實の方が遙かに重い。そして一人柳五兒のみならず、園外の侍女達が自分の希望や周囲の期待に基づき、あれこれ手蔓を求めて何とか入園を果たそうとするのは當然だし、またそのこと自體の是非など問えない。しかし侍女であればあやであれ、入園による生活の安定をもくるむ限り地位の確保をめぐる利害關係を避けて通れない。地上の特權は常にそうした關係の上に成り立つからだ。大觀園もまた一つの手頃な場所としてしか遇しない意識は、大觀園を少女の世界と規定する幻想とは本質的に無縁だ。侍女達自身も地位確保の條件となるという點を除けば少女ということを特別に意識しない。彼女達が寶玉の幻想を自らの幻想とすることなどあり得ない。

柳五兒の橋渡し役をする芳官や小燕とは反對に、司棋（迎春の侍女）は柳五兒の母親を追い出し、その後釜に叔母を送り込もうとして失敗するが、現實の關係にひきずられて奔走する彼女達は、周囲と無用の摩擦を生じないよう心がける鴛鴦・平兒などに比べるといかにも危く感じられる。だが現實の關係への意識に本質的相違はなく、それを積極的に操るか否かが兩者を分けるに過ぎない。そこにはおそらく現在の地位が絡む。こうした行動は寶玉の幻想とは無縁だ。ここでは侍女達の行動が寶玉の幻想を裏付けるのではなく、寶玉の幻想が侍女達の行動を何もかも許す、つまり攻めから守りに變



らざるを得ない。それでも寶玉の幻想は全ての侍女を組み込もうとする。前章で取り上げた誕生祝は柳五兒の母親を追出す企みが潰えた後によりやくめぐつて来る。

## V

これまで辿って来たような人間關係の龜裂は寶玉の誕生日を過ぎると更に深刻化する。渦巻く嫉妬や怨恨は派手な口喧嘩などで發散されずに、逆に心の奥深く沈み込み、相手を死に至らしめずにはおかぬ執念に凝縮していく。對立關係は必ず清算されねばならぬ——鳳姐が尤二姐を自殺に追いやってその不吉な幕が開く（第68、69回）。個人的な怨念の深まりとともに、主人同士・主人と召使・召使同士の様々な龜裂が上から下まで分かち難く結びついていく情況も見逃せない。そこでは鳳姐すら決して一方的な勝利者ではない。

邢夫人は鴛鴦を求めてつまらない目を見てからは、賈母が益々自分に冷淡になり、鳳姐の體面の方が逆に自分より勝ると考えます。しかも先日南安太妃がお越しになって姉妹達に會いたがると、賈母はまた探春だけ呼んで迎春の方は有って無きが如しだったので、疾うに心中穏かではなかったのですが、表には出せません。それとつまらぬ手合いが傍に居て、その連中は嫉みや怨みをぶちまけるわけにはいかないので、陰でデマを飛ばし事を起して主人をそのかします。最初はあちらの召使を譏るだけでしたが、次第に鳳姐まで譏るようになり、鳳姐のことを「大奥様（賈母）を言いくるめて御機嫌ばかり取り、やたらと威勢を張るのがことのほか好き。璉若様を尻に敷き、二の奥様（王夫人）をそそのかして、こちらのちゃんとした奥様の方は眼中にありません。」と告げ口します。後には王夫人まで檜玉にあげ、「大奥様が奥様をお氣に召さないのは二の奥様と二の若奥様（鳳姐）の差し金です。」と譏る始末。邢夫人がど

んなにすっかりした心の持主だったとしても、女性には結局猜疑心を起すのを免れませんから、近頃ではこのために心底鳳姐を憎んでいます。(第71回)<sup>38)</sup>

龜裂の重なりが憎惡を深める中で、侍女とばあやの對立もまた他の龜裂と絡み合いながら決定的段階を迎える。侍女達に警戒の目が向けられる直接の原因は春囊の發見(第73回)だが、それに先立つ賭博の摘發も見過せない。賈母は姉妹達のとりなしを固く拒み、迎春の乳母に至るまで厳しく處分する。<sup>39)</sup> 賈母の斷固たる態度は園内の空氣を緊張させる。それゆえ春囊の發見では、「この機に乘じ、大きくなった者やじゃや馬については落度につけ込んで追い出して嫁にやってしまえば、第二の事件は起りっこありませんし、費用も省けます。」という一層嚴しい對應は避けられない。ただ提案者鳳姐がどこまで本氣だったかはいささか疑問だが。<sup>40)</sup>

しかし鳳姐の内心がどうであれ、内偵の對象が大觀園の侍女である以上、彼女達に怨みを抱く者にとっては絶好の機會となる。邢夫人付きの王善保のかみさんの讒言により、<sup>41)</sup> 内偵は是非ともやるべき重大事となる。大觀園が不信の眼差しを浴びる中で侍女とばあやの對立は後者に優位に傾く。最初に槍玉にあげられた晴雯について王夫人は「先日見かけた傲慢な子だろう」と推測する。鳳姐は「奥様が御覽になったのは彼女に似ているようですが、當日のことを忘れてしまったので根據の無いことは申しません。」と答え、できればうやむやにしたいようだが、それも王善保のかみさんの「呼び出して確かめればいい」の一言で吹き飛ぶ。晴雯の召喚に成功した王善保のかみさんは晴雯を見て一段と深まった王夫人の怒りに乗じ、内偵以上に厳しくやろうともくろむ。<sup>42)</sup> これに對して鳳姐はなすすが無い。私怨を晴らそうとする王善保のかみさんの腹は讀めていようし、性急な搜索がろくな結果をもたらさないことも長年人の上に立ってきた彼女なら見抜けよう。にも関わらず王善保のかみさんを退け切れなかったのは後ろに控える邢夫人のせいだ。<sup>43)</sup> 邢夫人に人前で恥までかかされている(第71回)鳳姐としては口を嚙まざるを得まい。

さて搜索は王善保のかみさんの外孫娘司棋が持っていた従弟潘又安の手紙を最大の收穫として終り、おまけにその最中には探春、翌日には邢夫人から打たれるなど、王善保のかみさんにとっては散々な結果となる。ただ王夫人が警戒心を強めたのは確かで、それゆえ侍女達への悪口雑言が簡単に取り上げられる。王夫人は直接怡紅院に乗り込んで芳官や四兒を追出すが、それは大觀園は少女の世界という幻想の現實性の無さを寶玉に知らしめる。芳官達の行動は現實の關係を意識するという點で、襲人の「元來ここ一二年、王夫人が自分を重んじてくれるので一層自分を大切にし、人のいない所で、或いは夜分に寶玉とは決してふざけたりせず、そこで小さい頃よりも却ってよそよそしくなっていました。」(第77回)という態度に通じる。もちろん寶玉にとってはどうでもいいことだ。それが一方は葬り去られ、一方は生き残る。侍女としてあるべき姿が強制され、少女ということは度外視される。これだけでも寶玉の幻想は確實に揺らぐが、晴雯の追放がそれに追い打ちをかける。

晴雯は現實の關係を利用せず、またそれに怯えもしない。そんな制約など完全に無視する。他の侍女達は姉妹達の側から上下關係を取り拂われるのだが、晴雯はまるで違う。

寶玉は晴雯と麝月が(襲人の夜具や化粧道具を)きちんと按配するのを見ていましたが、(實家へ歸った襲人に)送り終ると二人とも化粧を落として着換えをします。晴雯は火鉢にへばりついたままです。

(麝月) あなた今日はお嬢さんぶらずに少しは動いてよ。

(晴雯) あんたたちが皆いなくなつてから私が動けばいいじゃない。あんたたちがいる間は樂をさせてもらうわ。

(麝月) おねえさま、私は床を延べますから、あなたは姿見の覆いを降ろして上の把手を動かしてくださいな。あなたの方が背が高いんですもの。

そう言いながら寶玉のために床を延べに行きます。

（晴雯）あーあ、人が坐って暖まったばかりなのに、あんたったらすぐ邪魔しに来るんだから。（第51回<sup>㉔</sup>）  
というふてぶてしさも、病氣の身でありながら忠告にも耳を貸さず、命がけて雀金裘を繕って、

晴雯は何度か咳き込んだ擧句にやっと繕い終りましたが、「繕うことは繕いましたけど結局似てませんね。でもこれ以上は無理です。」と言うなり、アアと叫んで倒れ込んでしまいました。（第52回<sup>㉕</sup>）

と全精力を使い果たす彼女の姿と考え合わせるなら、いかにも侍女らしく寶玉の傍に居ることを拒否する態度の現われと言えよう。「あなたは毎日彼女から毒づかれないうちやうていけませんのね。」（第63回）という襲人の冷やかさは、晴雯が侍女として諫めるのを通り越して寶玉と對等にふるまうことを物語る。非公式ながらも側室の待遇を受け、それを氣にする襲人を念頭に置いて晴雯の無念の思いに觸れるならば、<sup>㉖</sup>彼女が自力で上下關係を無化し、ただ少女として大觀園に存在したことは一層明らかになる。だからこそ寶玉も「私には晴雯がどんな罪を犯したのかどうしてもわからない。」（第77回）と慟哭して已まない。晴雯を守れぬ大觀園は幻想の根據たる資格を失い、またそんな大觀園に生き残る以上、侍女達が幻想を支えて見せることもあり得ない。むしろ晴雯が芙蓉の花神になるという報告（第78回）に寶玉は希望を見出す。

どんな形にせよ少女達が<sup>㉗</sup>大觀園を去ること自體が既に寶玉の幻想を揺るがす以上、姉妹達とて決して安泰ではない。迎春と香菱が園を去ることへの彼の嘆きは深い<sup>㉘</sup>が、寶釵の場合はもっとひどい<sup>㉙</sup>。前の二人が已むを得ず去ったのに對し、寶釵は自分の意志で行ったからだ。残った者も探春は搜索のことで、惜春は兄嫁の尤氏と仲違いして（第74回）詩社を起した頃の餘裕を失っている。黛玉と湘雲だけが中秋節に辛うじて聯句をこしらえるが、それとて「凹晶館に詩を聯<sup>つ</sup>ねて寂寞を悲しむ」（第76回）で、蘆雪庵での「卽景聯句」とは餘りにも對照的だ。（周圍の暗さ、人數の少なさ、競り合いの無さ）そして少女達の無念の思い、不幸な運命を全て呑み込んで精神的に切り崩された時、寶玉は大觀園という根據を完全に失う。

夢の中でお晴雯を呼んだり、魔物を怖がったり、あれやこれやで安らぎません。翌日には食欲がなくなり、熱も出ます。これは全て先頃の大觀園搜索・司棋の追放・迎春との別れ・晴雯への悲しみなどの羞恥・驚愕・恐怖・傷心をもたらしたもので、おまけに風邪をひきこんだため、それらが下地になって發病し、寢込んでしまったのです。(第

79回)

寶玉に残されたのは黛玉その人だけで、彼女がいなくなってしまうえば寶玉の存在理由は全く失われ、塵縁盡きた彼は天上世界へ歸って行くことになる。

## VI

寶玉の幻想と現實の少女達とは本質的に無縁なようだ。寶玉の幻想は天賦の性格の癖として少女達の態様に關わりなくあらかじめ確立しているし、少女達の方も黛玉・晴雯ですら彼の幻想を取り込もうなどとは意識しない。寶玉の満足は目の前の少女達に幻想の實現を見たため、逆に悲嘆はその崩壊のために他ならず、幻想そのものはどんな相對性にも曝されずに済む。言わば現實に根を持たない。従って變容を蒙らない寶玉の幻想についてはその内容が何かではなく、それが現實とどんな關係を結んでいくかに興味が絞られる。

自身ではなく、その關係性——これはそもそも《紅樓夢》の基本的特徴で、その人物描寫には確かに高い評價が與えられているが、これとて多數の登場人物の有機的配置という前提があればこそだ。個人の内面をじっくり追う(心理描寫)よりも、日々生じる事柄が強い他者との關わりの中でその人物の既定の性格がどのように發揮されるか(會話や行動)に描寫の重點は置かれる。例えば寶玉と黛玉の慕情にしても「心の中で」と内面へ踏み込みながら、最後は次のように結

んで話を進めていく。

こうした言葉はみな二人が日頃からひそかに抱く想いで、つぶさには述べ難く、そこで今はただ彼等の外面の様子を述べるだけにします。(第29回)<sup>58</sup>

事柄は様々、人物は多彩——組み合わせは無限で、曹雪芹は小説全體の流れに應じてそれらを巧く配列する。既に取り上げた蘆雪庵と凹晶館の聯句がそうだし、鳳姐の誕生祝(第43回)に關連して庚辰本の雙行批は、

一篇の書にあっていちいち誕生日を描寫したのでは文を成すだろうか。だから初めに寶釵(第22回)、盛りに鳳姐、終りに賈母(第71回)を用いるわけで、各々妙文があり、妙景がある。餘人については全く觸れないか、たまたまちよと觸れるかで、長かったり短かったりだが、情理になつてゐることは言うまでもない。くだくだしい決まり文句で人數分だけ誕生日を描寫するだろうか。

と述べる。<sup>59</sup>寶玉にしても彼一人取り出した所で奇妙な幻想を抱く少年という以上に描き様は無い。つまり一人きりでは物語を展開できない。天賦の幻想そのものにはどんな變化も生じない——矛盾の無い固定した幻想は絶對的だが、内部生命を失つて硬直している。「黛玉↓姉妹↓侍女」という過程も幻想がより廣範に實現していく、つまり新たな關係を次々と結んでいくことに意義があるわけで、幻想そのものに則して見れば彼女達はその外皮となつたに過ぎず、剥ぎ取られてしまえばそれまでののだ。

多數の人物が登場するのも《紅樓夢》の眞髓が多様な關係の描寫にあるからで、日常生活を活寫する點で《金瓶梅》を受け繼ぐが、手法はそれを凌駕する。<sup>60</sup>曹雪芹の作家としての力量は「多多益辦」の韓信に似ていなくもなく、同じ形式で彼を乗り越えるのは不可能に近い。小説の新たな可能性は曹雪芹が寶玉には課さなかつた自らの幻想の内省に求めるしかない。それは天上世界からの自立を約束する代わりに、現實が強い自らの相對性と向き合うことを餘儀なくさせる。そ

ここでは他者（天上世界も含めて）との關係が逆に自らの幻想を規定し、翻弄する。しかし硬直した幻想が絶え間の無い新たな關係に生命の根據を見出していく遠心性を持つのに對し、それ自身矛盾に満ちた幻想が矛盾自體に生命の根據を見出す求心性を持つことは確かに個の自立を物語る。その地點に踏み込んだ時、小説に於ける近代が始まるのではなからうか。そしてそれは、

通常各回には一つの單純な生活の斷片ではなく、複数のプロットが入りまじる。これは當然その題材と關係あるが、同時にわが國の過去の章回體小説の特徴をも繼承している。<sup>59</sup>

という、あらかじめ多様なプロットを用意してそれらを網の目のように繋いでいく章回小説からの脱皮をも意味しよう。また一方《金瓶梅》と《紅樓夢》は天上世界を大枠として設定し、「宿命論思想」を共有するが、<sup>60</sup>西門慶の生活者としてのしたたかさを《紅樓夢》では鳳姐がひきついで脇役に回り、主人公寶玉は自らの幻想によって現實を再構成する點が注目される。西門慶（鳳姐）が個々の具體的な關係にエネルギーに對應するに止まるのに對し、<sup>62</sup>寶玉はむしろ關係の總體Ⅱ世界をとらえようとする。その限界は既に述べたが、現實の中での幻想の堅持こそ《紅樓夢》の獨自性と言えよう。そして幻想の内省という近代的課題を残す。白話小説史に於ける《紅樓夢》の位置はこのあたりに求められそうだ。

## 註

- (1) 況家中現有幾個能詩會賦的姊妹，何不命他們進去居住，也不使佳人落魄，花柳無顏。却又想到寶玉自幼在姊妹叢中長大，不比別的兄弟，若不命他進去，只怕他冷清了，一時不大暢快，未免寶母王夫人愁慮，須得也命他進園居住方妙。（第23回）
- (2) 他（寶玉）說：「女兒是水作的骨肉，男人是泥作的骨肉。我見了女兒，我便清爽；見了男子，便覺濁臭逼人。」（第2回）
- (3) 林黛玉道：「擻在水裏不好。你看這裏的水乾淨，只一流出去，有人家的地方，驢的臭的混倒，仍舊把花糟蹋了。那畸角上我有一個花冢。如今把他掃了，裝在這絹袋裏，拿土埋上，日久不過隨土化了，豈不乾淨。」
- (4) 尚古風俗，凡交芒種節的這日，都要設擺各色禮物祭饒花神。言芒種一過便是夏日了，衆花皆卸，花神退位，須要饒行。然閨中更興這件風俗，所以大觀園中之人都早起來了。（第27回）
- (5) 話說林黛玉只因昨夜晴雯不開門一事，錯疑在寶玉身上。至次日又可巧遇見饒芳之期，正是一腔無明正未發洩，又勾起傷春愁思，因把些殘花落瓣去掩埋，由不得感花傷己，哭了幾聲，便隨口念了幾句。（第28回）

(6) 黛玉道：「既然定要起詩社，咱們都是詩翁了，先把這些姐妹叔嫂的字樣改了纔不俗。」李執道：「極是。何不大家起個別號，彼此稱呼則雅。我是定了『稻香老農』，再無人佔的。」探春笑道：「我就是『秋爽居士』罷。」寶玉道：「居士主人，到底不恰，且又累贅。這裏梧桐芭蕉儘有，或指梧桐芭蕉起個倒好。」探春笑道：「有了。我最喜芭蕉，就稱『蕉下客』罷。」衆人都道別致有趣。黛玉笑道：「你們快牽了他去，頓了脯子吃酒。」衆人不解。黛玉笑道：「古人曾云：『蕉葉覆鹿』。他自稱『蕉下客』，可不是一隻鹿了。快作了鹿脯來。」衆人聽了，都笑起來。

探春因笑道：「你別忙中使巧話來罵人。我已替你想了個極當的美號了。」又向衆人道：「當日娥皇女英灑淚在竹上成斑，故今斑竹及名湘妃竹。如今他住的是瀟湘館，他又愛哭，將來他想林姐夫，那些竹子也是要變成斑竹的，以後都叫他作『瀟湘妃子』就完了。」大家聽說，都拍手叫妙。林黛玉低了頭，方不言語。李執笑道：「我替薛大妹妹也早已想了個好的，也只三個字。惜春迎春都問是什麼。李執道：『我是封他『蘅蕪君』了，不知你們如何？』探春道：『這個封號極好。』

寶玉道：「我呢？你們也替我想一個。」寶釵笑道：「你的號早有了，『無事忙』三字恰當的很。」李執道：「你還是你的舊號『絳洞花王』就好。」寶玉笑道：「小時候幹的營生，還提他作什麼。」探春道：「你的號多的很，又起什麼，我們愛叫你什麼，你就答應着就是了。」寶釵道：「還得我送你個號罷。有最俗的一個號，卻於你最當。天下難得的，是富貴，又難得的是閒散，這兩樣再不能兼有，不想你兼有了，就叫你『富貴閒人』罷了。」寶玉笑道：「當不起，當不起，倒是隨你們混去罷。」

(8) 哀れと思つたかどうかは知らないが、一百二十回本では一番こたえる探春のセリフが無く、黛玉の提案で怡紅公子と決まる。

(9) 李執道：「怡紅公子是壓尾，你服不服。」寶玉道：「我的那首原不好，這評的最公。」(第37回)

李執笑道：「逐句評去，都還一氣，只是寶玉又落了第了。」寶玉笑道：「我原不會聯句，只好擔待我罷。」李執笑道：「也沒有社社擔待你的。」

白話小説史に於ける『紅樓夢』の位置

(10) 又說韻險了，又整誤了，又不會聯句了，今日必罰你。……(第50回) 李執道：「二姑娘四姑娘起個什麼？」迎春道：「我們又不會詩，白起個號作什麼？」探春道：「雖如此，也起個纔是。」寶釵道：「他住的是紫菱洲，就叫他『菱洲』，四丫頭在藕香榭，就叫他『藕榭』就是了。」

(11) 黛玉笑道：「意思卻有，只是措詞不雅。皆因你看的詩少，被他縛住了。把這首丟開，再作一首，只管放開膽子去作。」香菱聽了，默默的回來，率性連房也不入，只在池邊樹下，或坐在山石上出神，或蹲在地下掘土。來往的人都詫異。李執，寶釵，探春，寶玉等聽得此信，都遠遠的站在山坡上瞧着他笑。只見他皺一回眉，又自己含笑一回。寶釵笑道：「這個人定要瘋了。昨夜唧唧唧，直鬧到五更天纔睡下。沒一頓飯的工夫天就亮了，我就聽見他起來了，忙忙碌碌梳了頭，就找釵兒去。一回來了，默了一日，作了一首又不好，這會子自然另作呢。」寶玉笑道：「這正是『地靈人傑』。老天生人，再不虛賦情性的。我們成日歎說，可惜他這麼個人竟俗了。誰知道底有今日。可見天地至公。」(第49回)

(12) 如今香菱正滿心滿意只想作詩，又不敢十分囑咐寶釵，可巧來了個史湘雲。那史湘雲又是極愛說話的，那裏禁得起香菱又請教他談詩，越發高了興，沒晷夜高談闊論起來。寶釵因笑道：「我實在聒噪的受不了了。一個女孩兒家，只管拿着詩作正經事講起來，叫有學問的人聽了反笑話，說不守本分的。一個香菱沒開清，偏又添了你這麼個話口袋子，滿嘴裏說的是什麼：怎麼是杜工部之沉鬱，韋蘇州之淡雅，又怎麼是溫八叉之綺靡，李義山之隱僻。放着兩個現成的詩家不知道，提那些死人做什麼！」湘雲聽了，忙笑問道：「是那兩個？好姐姐，你告訴我。」寶釵笑道：「默香菱之心苦，瘋湘雲之話多。」二人聽了，都大笑起來。

(13) 湘雲正渴了，忙忙的吃茶，已被岫烟道：「空山泣老鴉。階前墮上下，」湘雲忙丟了茶杯，忙聯道：「池水任浮漂。照耀臨清曉，」迎春是病缺，惜春是繪を描くために休みをもらっている。

(14) 寶玉正看寶釵，寶琴，黛玉三人共戰湘雲，十分有趣，那裏還顧得聯詩。……湘雲笑道：「你快下去。你不用，倒耽擱了我。」



(16) 李執道：『大小都有個天理。譬如老太太屋裏，要沒那個鴛鴦，如何使得。從太太起，那一個敢駁老太太的，他現敢駁回。偏老太太只聽他一個人的話。老太太的那些穿帶的，別人不記得，他都記得，要不是他經管着，不知叫人誑騙了多少去呢。那孩子心也公道，雖然這樣，倒常替人說好話兒，還倒不倚勢欺人的。』惜春笑道：『老太太昨兒還說呢，他比我們還強呢。』平兒道：『那原是個好的，我們那裏比的上他。』寶玉道：『太太屋裏的彩霞，是個老實人。』探春道：『可不是，外頭老實，心裏有數兒。太太是那佛爺似的，事情上不留心，他都知道。凡百一應事，他提督太太行。連老爺在家出外去的一應大小事他都知道，太太忘了，他背地裏告訴太太。』李執道：『那也罷了。』指着寶玉道：『這一個小爺屋裏，要不是襲人，你們度量到個什麼田地！鳳丫頭就是楚霸王，也得這兩隻膀子好舉千斤鼎。他不是這丫頭，就得這麼周到了！』(第39回)

(17) 寶玉忙勸道：『好姐姐，別傷心，我替他們兩個賠個不是罷。』平兒笑道：『與你什麼相干？』寶玉笑道：『我們弟兄姊妹都一樣，他們得罪了人，我替他賠個不是，也是應該的。』(第44回)

(18) 昨兒還打平兒呢，虧你伸的出手來。那黃湯難道灌了狗肚子裏去了。氣的我只要給平兒打抱不平兒，付度了半日，好容易狗長尾巴尖兒的好日子，又怕老太太心裏不受用，因此沒來，究竟氣還未平。你今兒又招我來了。給平兒拾鞋也不要。你們兩個，只該換一個過子纔是。』(第45回)

(19) 襲人道：『二月十二是林姑娘，怎麼沒人？就只是咱家的人。』探春笑道：『我這個記性是怎麼了！』寶玉笑指襲人道：『他和林妹妹是一日，所以他記得。』探春笑道：『原來你兩個倒是一日。每年連頭也不給我們磕一個。平兒的生日，我們也不知道，這也是纔知道。』平兒笑道：『我們是那牌兒名上的人，生日也沒拜壽的福，又沒受禮的職分，可吵鬧什麼。可不悄悄的過去。今兒他又偏吵出來了，等姑娘們回房，我再行禮去罷。』探春笑道：『也不敢驚動。只是今兒倒要替你過個生日，我心裏纔過得去。』寶玉湘雲等一齊都說：『很是。』

(20) 終久讓寶琴袖烟二人在上，平兒面西坐，寶玉面東坐。探春又接了鴛鴦來，二人並肩對面相陪。西邊一桌：寶釵，黛玉，湘雲，迎春，惜春，一面又拉了香菱玉釧兒二人打撲。三桌上：尤氏李執，又拉了襲人彩雲陪坐。四桌上：便是紫鵲，鶯兒，晴雯，小螺，司棋等人圍坐。(第62回)

(21) 寶琴想了一想，說了個『老』字。香菱原生於這令，一時想不到，滿室滿席都不見有與『老』字相連的成語。湘雲先聽了，便也亂看，忽見門斗上貼着『紅香圃』三個字，便知寶琴覆的是『吾不如老圃』的『圃』字。見香菱射不着，眾人擊鼓又催，便悄悄的拉香菱，教他說『藥』字。(第62回)

(22) 湘雲等不得，早和寶玉三五亂叫，划起拳來。那邊尤氏和鴛鴦隔席，也七八亂叫划起來，平兒襲人也作了一對划拳。叮叮噹噹，只聽得腕上的鐲子響。(第62回)

(23) 這些人因寶母王夫人不在家，沒了管束，便任意取樂，呼三喝四，喊七叫八。滿廳中紅飛翠舞，玉動珠搖，真是十分熱鬧。

(24) 小燕笑道：『依我說，咱們竟悄悄的把寶姑娘林姑娘請了來頑一回子，到二更天再睡不遲。』襲人道：『又開門喝戶的鬧。倘或遇見巡夜的問呢。』寶玉道：『怕什麼。咱們三姑娘也吃酒，再請他一聲纔好。還有琴姑娘。』眾人都道：『琴姑娘罷了，他在大奶奶屋裏，叨登的大發了。』

寶玉道：『怕什麼。你們就快請去。』小燕四兒都得不了一聲，二人忙命開了門，分頭去請。晴雯麝月襲人三人又說，他兩個去請，只怕寶林兩個不肯來，須得我們請去，死活拉他來。於是襲人晴雯忙又命老婆子打個燈籠，二人又去。果然寶釵說夜深了，黛玉說身上不好，他二人再三央求，說：『好夕給我們一點體面，略坐坐再來。』探春聽了，卻也歡喜，因想不請李執，倘或被他知道了，倒不好，便命翠墨同了小燕也再三的請了李執和寶琴二人會齊，先後都到了怡紅院中。襲人死活拉了香菱來。炕上又併了一張桌子，方坐開了。

(25) 俞平伯『壽怡紅羣芳開夜宴席次圖』(參著《紅樓夢研究》)及卞周紹良『《紅樓夢》枝譚』(紅樓夢研究集刊4)參照。

(26) 鳳姐知道那夫人秉性愚偏，只知承順賈赦以自保，次則貪婪財貨爲自得。家下一應大小事務，俱由賈赦擺布。凡出入銀錢事務，一經他手，便覺異常。以賈赦浪費爲名。須得我就中儉省，方可償補。兒女奴僕，一人不靠，一言不聽的。(第46回)

(27) 剛吃茶時，只見吳新登的媳婦進來回說：『趙姨娘的兄弟趙國基昨兒死了。昨兒同過太太，太太說知道了，叫回姑娘奶奶來。』說畢，便垂手旁侍，再不言語。彼時來回話的不少，都打聽他二人辦事如何。若辦得妥當，大家則安個畏懼之心；若少有嫌隙不當之處，不但不畏服，一出二門，還要編出許多笑話來取笑。吳新登的媳婦心中已有主意，若是鳳姐前，他便早已默動，說出許多主意，又查出許多舊例來，任鳳姐兒揀擇施行；如今他藐視李執老實，探春是青年的姑娘，所以只說出這一句話來，試他二人有何主見。

(28) 更又將梨香院內伏侍的衆婆子一概撤回，併散在園內聽使，更覺人多了幾十個。因文官等一千人或心性高傲，或倚勢凌下，或揀衣挑食，或口角鋒芒，大概不安分守理者多，因此衆婆子無不忿怨，只是口中不敢與他們分證。如今散了學，大家稱了願，也有丟開手的，也有心地狹窄猶懷舊怨的。(第58回)

(29) 外面跟着趙姨娘來的一千人聽見如此，心中各各稱願，都念佛說：『也有今日。』及有那一千懷怨的老婆子，見打了芳官，也都稱願。那婆子深妬襲人晴雯一千人，已知凡房中大些的丫鬟都比他們有些體統權勢，凡見了這一千人，心中又畏又讓，未免又氣又恨，亦且遷怒於衆。(第59回)

(30) 時常我勸你別爲我們得罪人。你只顧一時爲我們那樣，他們都記在心裏，遇着坎兒，說的好說不好聽，大家什麼意思。(第20回)

(31) 女孩兒未出嫁時是顆無價的寶珠；出了嫁，不知怎麼就變出許多的不好的毛病來，雖是顆珠子，卻沒有光彩寶色，是顆死珠子了；再老了，更變的不是珠子，竟是魚眼睛了。分明一個人，怎麼變出三樣來。

(32) もちろん祖母や母は例外だし、尤氏（賈珍の妻）、鳳姐（賈璉の妻）、李執（賈珠の妻）、秦可卿（賈蓉の妻）に對しても何ら抵抗は無い。

白話小説史に於ける『紅樓夢』の位置

(34) 近親は最も抽象化しにくい。原來這柳家的有個女兒。今年纔十六歲，雖是廚役之女，卻生的人物與平，鬢，紫，鴛鴦類。因他排行第五，便叫他五兒。因素有弱疾，故沒得差。近因柳家的見寶玉房中的丫鬟差輕人多，且又聞得寶玉將來都要放他們，故如今要送他到那裏去應名兒。正無頭路，可巧這柳家的是梨香院的差役，他最小意殷勤，伏侍得芳官一千人比別的乾娘還好，芳官等亦待他們極好。如今便和芳官說了，央芳官去與寶玉說。(第60回)

(35) 雖如此說，我卻性急，等不得了。趁如今挑上來了，一則給我媽爭口氣，也不枉養我一場；二則添上月錢，家裏又從容些；三則我的心開一開，只怕這病就好了。——便是請大夫吃藥，也省了家裏的錢。

(36) 話說平兒出來，吩咐林之孝家的道：『大事化爲小事，小事化爲沒事，方是興旺之家。若得不得了一點子小事，便揚鈴打鼓的亂折騰起來，不成道理。如今將他母女帶回，照舊去當差；將秦顯家的仍舊退回。再不必提此事，只是每日小心巡察要緊。』說畢，起身走了。柳家的母女忙向上磕頭。林家的帶回園中，回了李執探春二人，皆說：『知道了，能可無事很好。』司棋等人空興頭了一陣。(第62回)

(37) 第54回までを盛、それ以降を衰と大別する見方が一般的だが、あまりこだわらなくてもいいと思う。

(38) 邢夫人自爲要爲焉之後，討了沒意思，後來見賈母越發冷淡了他，鳳姐的體面反勝自己；且前日南安太妃來了，要規他姊妹，賈母又只令探春出來，迎春竟似有如無，自己心裏早已忿忿不樂，只是使不出來。又值這一千小人在側，他們心內嫉妬嫉怨之事不敢施展，便背地裏造言生事，調撥主人。先不過是告那邊的奴才；後來漸次告到鳳姐，只說鳳姐『只哄着老太太喜歡了，他好就中作威作福。轉治着璉二爺，調唆二太太，把這邊的正經太太倒不放在心上。』後來又告到王夫人，說：『老太太不喜歡太太，都是二太太和璉二奶奶調唆的。』邢夫人總是鐵心銅膽的人，婦女家終不免生些嫌隙之心，近日因此着實惡絕鳳姐。賈母忙道：『你姑娘家，如何知道這裏頭的利害。你自爲要錢常事，不過怕起爭端，殊不知夜間既耍錢，就保不住不吃酒；既吃酒，就免不了不得』

門戶任意開鎖，或買東西，尋張不見李。其中夜靜人稀，趁便藏賊引盜何等事作不出來。況且園內你姊妹們起居所伴者皆係丫頭媳婦們，賢愚混雜。賊盜事小，再有別事，倘略沾帶些，關係不小。這事豈可輕恕。」

(第73回)

(40) 第74回冒頭で、私は「好好先生」になって餘計な氣苦勞はしないことにする、と平兒に洩らしている。さすがの鳳姐もくたびれたと言えようか。

(41) 這王善保家正因素日進園去，那些丫鬟們不大趨奉他，他心裏大不自在，要尋他們的故事又尋不着，恰好生出這事來，以為得了把柄；又聽王夫人委託他，正撞在心坎上，連忙應道：「這個容易。不是奴才多話，論理這事該早嚴緊些的。太太也不大往園裏去，這些女孩子們，一個個倒像受了封誥是的，他們就成了千金小姐了。鬧下天來，誰敢哼一聲兒。不然，就調唆姑娘的丫頭們，說欺負了姑娘們了，誰還耽得起。」(第74回)

(42) 王善保家的道：「太太請養息身體要緊。這些小事，只交與奴才。如今要查這個主兒，也極容易。等到晚上園門關了的時節，內外不通風，我們竟給他們個猛不防，帶着人到各處丫頭們房裏搜尋。想來誰有這個，斷不單只有這個，自然還有別的東西。那時翻出別的來，自然這個也是他的了。」(第74回)

(43) 鳳姐見王夫人盛怒之際，又因王善保家的是邢夫人的耳目，常時調唆着邢夫人生事，縱有千百樣言辭，此刻也不敢說，只低頭答應着。(第74回)

(44) 原來王夫人自那日着惱之後，王善保家的去趁勢告倒了晴雯，本處有人 and 園中不睦的，也就隨機趁便，下了些話。王夫人皆記在心裏，因節間有礙，故忍了兩日，所以今日特來親自閱人。一則為晴雯猶可；二則因竟有人指寶玉為由，說他大了，已解人事，都由屋裏的丫頭們不長進教習壞了。因這事更比晴雯一人較甚，乃從襲人起以至於極小的粗活小丫頭們，個個親自看了一遍。(第77回)

(45) 芳官は柳五兒のことで、寶玉と同じ日に生まれた四兒は、「同じ日に

生まれた者は夫婦になる」という彼女の言葉のために王夫人の怒りを買う。

(46) (王夫人) 因又吩咐襲人麝月等人：「你們小心！往後再有一點分之外事，我一概不饒。因叫人查看了，今年不宜遷挪，暫且挨過今年，明年一併給我仍舊搬出去心淨。」說畢，茶也不吃，遂帶領眾人又往別處去閱人。(第77回)

(47) 寶玉看着晴雯麝月二人打點妥當，送去之後，晴雯麝月皆卸罷妝脫換過裙襖。晴雯只在熏籠上圍坐。麝月笑道：「你今兒別裝小姐了，我勸你也動一動兒。」晴雯道：「等你們都去盡了，我再動不遲。有你們一日，我且受用一日。」麝月笑道：「好姐姐，我鋪牀，你把那穿衣鏡的套子放下來，上頭的划子划上。你的身量比我高些。」說着，便去與寶玉鋪牀。晴雯瞧了一聲，笑道：「人家纔坐暖和了，你就來鬧。」

(48) 晴雯已嗽了幾陣，好容易補完了，說了一聲：「補雖補了，到底不像。——我也再能了。」噯哟了一聲，便身不由主倒下了。

(49) 晴雯嗚咽道：「有什麼可說的。不過捱一刻是一刻，挨一日是一日。我已知橫豎不過三五日的光景就好回去了。只是一件，我死也不甘心的：我雖生的比人略好些，並沒有私情密意，勾引你怎樣，如何一口死咬定了我是狐狸精！我大不服。今日既已擔了虛名，而且臨死，不是我說一句後悔的話，早知如此，我當日也另有個道理。不料癡心傻意，只說大家橫豎是在一處。不想平空裏生出這一節話來，有冤無處訴。」(第77回) 迎春については、「又聽得說陪四個丫頭過去，更又跌足自歎道：『從今後這世上又少了五個清潔人了。』」(第79回) また香菱については、「寶玉冷笑道：『雖如此說，但只我倒替你耽心慮後呢。』」(第79回)

(51) 寶玉又到蘅蕪苑中，只見寂靜無人，房內搬的空空落落的，不覺吃一大驚。忽見個老婆子走來，寶玉忙問這是什麼緣故。老婆子道：「寶姑娘出去了。這裏交給我們看着，還沒有搬清楚呢。我們幫着送了些東西去，這也就完了。你老人家請出去罷，讓我們掃掃灰塵也好。從此你老人家也省跑這一處的腿子了。」寶玉聽了，怔了半天，因看着那院中的香藤異蔓，仍是翠翠青青，忽比昨日好似改作淒涼了一般，更又添了傷

感。默默出來，又見門外的一條翠機球上也半日無人來往，不似當日各處房中丫鬟不約而來者絡繹不絕；又俯身看那墀下水，仍是溶溶脈脈的流將過去。心下因想天地間竟有這樣無情的事！（第78回）

睡夢之中猶喚晴雯，或魘魔驚怖，種種不寧。次日便懶進飲食，身體作熱。此皆近日抄檢大觀園，逐司棋，別迎春，悲晴雯等，若辱驚恐悲悽之所致，兼以風寒外感，故釀成一疾，臥牀不起。

恰近日這神瑛侍者（寶玉的前身）凡心偶熾，乘此昌明太平朝世，意欲下凡，造歷幻緣，已在警幻仙子案前掛了號。（第1回）

太愚の《紅樓夢人物論》（1948年）が古典的名著だが、文革以後の紅學界にも好論文が少なくない。

即如此刻，寶玉心內想的是：『別人不知我的心，還有可恕；難道你就不想我的心裏眼裏只有你！你不能爲我煩惱，反來以這話奚落堵噎我，可見我心裏一時一刻白有你有你，你竟心裏沒我。』心裏這意思，只是口裏說不出來。那林黛玉心裏想着：『你心裏自然有我。雖有金玉相對之說，你豈是重這邪說，不重我的。我便時常提這金玉，你只管了然目若無聞的，方見得待我重而毫無此心了。如何我只一提金玉的事，你就着急，可知你心裏時時有金玉，見我一提，你又怕我多心，故意着急，安心哄我。』看來兩個人原本是一個心，但都多生了枝葉，反弄成兩個心了。

那寶玉心中又想着：『我不管怎麼樣都好，只要你隨意，我便立刻因你死了也情願。你知也罷，不知也罷，只由我的心，方可見你和我近，不和我遠。』那林黛玉心裏又想着：『你只管你，你好我自好，你何必爲我而自失。殊不知你失我自失。可見是你不叫我近你，有意叫我遠你了。』（第29回）

この條も心理描寫と言ふよりは、むしろ會話の變形と言つた方が適切かもしれない。

如此之語皆他二人素昔所存私心，也難備述，如今只述他們外面的形容。

一部書中，若一個一個只管寫過生日，復成何文哉。故起用寶釵，盛用阿鳳，終用寶母，各有妙文，各有妙景。餘者諸人，或一筆不寫，或偶

白話小說史に於ける《紅樓夢》の位置

因一語帶過，或豐或簡，其情當理合，不表可知。豈必諄諄死筆，按數而寫衆人之生日哉。

批書人在這裏還沒有說到寶釵的過生日。那樣衆多的人物只寫四個人的生日，固然這已表現作者有匠心，有剪裁。但更難得的是寫得一點不重複，而且全部成爲書中的十分必要部分。（何其芳《論紅樓夢》）

張俊《試論〈紅樓夢〉與〈金瓶梅〉》（北京師範大學學報81・3）參照。

甚至常常在一回裏，也不是一個單純的生活的片段，而是幾個綫索交織在一起。這自然和他的題材有關係，但同時也是繼承了我國過去的章回體小說的特點。（何其芳《論紅樓夢》）中國作家協會文學講習所での講演（57年1月）でも同じことを語る——另外，《紅樓夢》還繼承了章回小說傳統。章回小說的每一回裏常常不是一個綫索而是好幾個綫索，這可以說是章回小說的特點。《紅樓夢》也正是這樣的。（紅樓夢研究集刊4）

（60）注（58）に同じ

伊藤漱平《金陵十二釵と〈紅樓夢〉十二支曲（覺書）》（大阪市立大學《人文研究》19・10）參照。

（62）鳳姐の魅力はある意味で他を壓する。次の批評は核心を衝いたものとしてよく知られている。

在個性表現上，三國演義的讀者怕曹操，罵曹操，曹操死了想曹操；同樣，紅樓夢的讀者怕鳳姐，罵鳳姐，不見鳳姐想鳳姐。（太愚《王熙鳳論》）